

千鳥ヶ淵周辺の利用の現況と課題

1. 千鳥ヶ淵周辺における公園的利用の経緯

- ・ 千鳥ヶ淵及び牛ヶ淵は、当初は、江戸城の飲料水源として造成されたもので、他の濠とともに江戸城を防護する役割を担っていたが、武蔵野台地の東端部にあたり、高台から濠や市中を見下ろす風光明媚な場として、既に江戸時代から認識されていたと考えられる。
- ・ 幕末以降は軍事関係施設の集積地及び鎮魂の場、あるいは教育関連施設が集まる一方、公共交通の普及と共に娯楽・観光の東京名所としての役割も果たしてきた。
- ・ 第二次世界大戦後、千鳥ヶ淵は皇居前広場地区や他の濠とともに国民公園とされ、平和的文化的国家の象徴として国民に開放された。千代田区は観光事業発展に力を入れ、昭和 25 年千鳥ヶ淵に、風致の鑑賞と国民レクリエーションを目的に区営ボート場を開設した。千鳥ヶ淵に関する区のイベントは昭和 29 年からのさくらまつり、昭和 33 年からの納涼とうろう流しが、それぞれ春や夏の風物詩的事業として行われている。
- ・ 昭和30年代後半からは、北の丸公園の整備が行われ、千鳥ヶ淵の周囲が一般の利用に供されることとなった。また、日本武道館、国立近代美術館工芸館、科学技術館などの文化施設の立地も進んだ。
- ・ また、昭和 43 年には都電が廃止され、昭和 54 年に千代田区により歩行者優先の千鳥ヶ淵緑道が整備された。沿道にはサクラが植えられた。
- ・ 現在の千鳥ヶ淵は、皇居外苑濠の中でももっとも公園的な利用が行われており、サクラの時期を中心に散策、ボート利用が行われている。観桜期には日本有数のサクラの名所として100万人の人出でにぎわっている。

千鳥ヶ淵と周辺地域の利用、景観に関する歴史

年	千鳥ヶ淵周辺の利用・景観に関するできごと	江戸城・皇居・周辺地域に関するできごと
1636(寛永13)	○現在の田安門が築造される。	○江戸城完成。(三代将軍家光)
1869(明治2)	○招魂社(後の靖国神社)建設後、園内に陸海軍の戦友会が桜を献納していき、桜の名所として親しまれる。	
1871(明治4)	○九段坂の陸軍省御用地内に常燈明台を建てる。	
1881(明治14)	○英国公使館前にアーネストサトウ氏が桜を手植え。	
1897(明治30)	○上記の公使館前の桜が東京市に寄贈される。	
1898(明治31)	○英国公使館前に桜並木が植樹され、千鳥ヶ淵沿いが桜の名所として親しまれるようになる。	
1900(明治33)	○代官町通りの整備により、新たに土橋が築かれ、千鳥ヶ淵は、千鳥ヶ淵と半蔵濠に分かれる。	
1907(明治40)	○牛ヶ淵、千鳥ヶ淵の土手を削り、坂下から坂上に市電を開通。	
1910(明治43)		○旧近衛師団司令部庁舎(後の東京国立近代美術館工芸館)建設。
大正	1919(大正8)	○明治期の市区改正事業の一環として千鳥ヶ淵公園が開園し、沢山の桜が公園に植樹された。
	1923(大正12)	○この後の帝都復興事業により、九段から半蔵門方面へ抜ける内堀通りが作られ、桜並木も英国公使館前から靖国神社まで続くように植えられた。
昭和	1933(昭和8)	○濠周辺、都市計画法に基づく美観地区に指定。(建築物の高さ31mまでに規制)
	1934(昭和9)	○軍人会館(現九段会館)完成。
	1946(昭和21)	○皇居周辺一帯を含む東京特別都市計画緑地を整備する都市計画決定。
	1950(昭和25)	○千鳥ヶ淵の区営ボート場が開設され、ボート利用が始まる。
	1954(昭和29)	○さくらまつり開始。
	1958(昭和33)	○納涼とうろう流し開始。
	1959(昭和34)	○「国民公園及び千鳥ヶ淵戦没者墓苑管理規則」公布。 ○千鳥ヶ淵戦没者墓苑建設。
	1960(昭和35)	○「江戸城跡」史跡指定。
	1961(昭和36)	○田安門、清水門が重要文化財指定。
	1963(昭和38)	○「皇居周辺北の丸地区の整備について」閣議決定。北の丸地区を皇居外苑の一部とし、森林公園として建設省が整備することとなる。
	1964(昭和39)	○日本武道館、科学技術館が北の丸公園に竣工。 ○千鳥ヶ淵の上に高速道路が開通。
	1969(昭和43)	○千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会により、千鳥ヶ淵に毎年コイの放流が行われた。(～昭和60年まで)
	1979(昭和54)	○千鳥ヶ淵緑道が整備され、北の靖国神社から南の千鳥ヶ淵公園まで桜の名所としてにぎわうようになる。

※参考:『事務提要(国民公園)』、『皇居外苑風致考』(池辺武人著)、『皇居前広場』(原武史著)、小平市立図書館HP江戸年表、千鳥ヶ淵、牛ヶ淵、北の丸公園及び周辺地区

2. 現在の千鳥ヶ淵及び周辺における公園的利用の概況

現在、千鳥ヶ淵における公園的利用としては、水面においては、ボート場の利用があり、濠周辺部においては歩道や広場における散策利用等が見られる。

現在、水辺へのアクセスはボート場1ヶ所だけであり、立ち入りはボート場利用者に限定されている。利用は、観桜期に集中している。

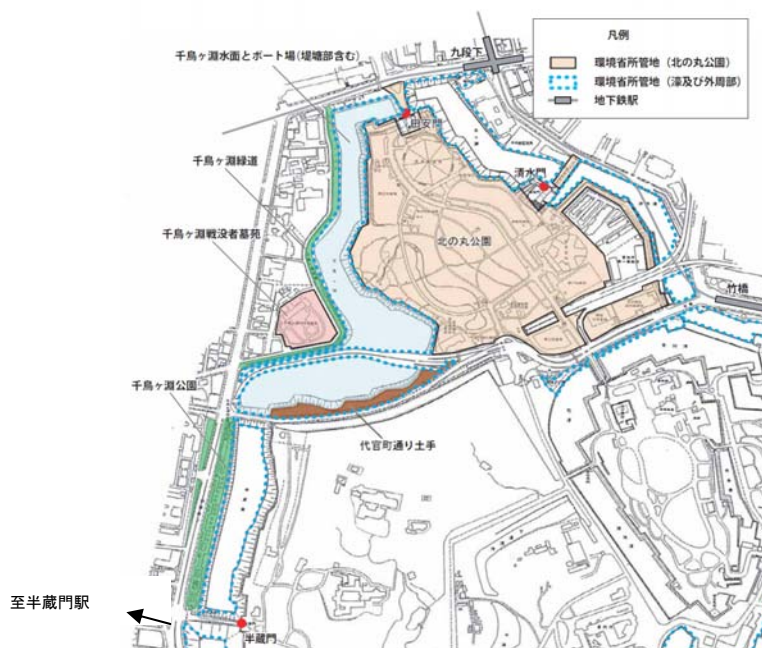
濠岸は石垣や急な斜面となっており、ボート場への進入路以外一般の立ち入りはできない。

また、千鳥ヶ淵周囲の石垣、堤塘の上は、周辺は、北の丸公園（皇居外苑）、代官町通り土手（皇居外苑）千鳥ヶ淵緑道（千代田区）等となっており、大部分が歩道で囲まれ濠が眺望できることから散策や広場での休憩などの利用が見られる。

散策利用は、四季を通じて行われているものの、大部分が観桜期に集中し、しかも、千鳥ヶ淵緑道側に集中していると考えられる。なお、この千鳥ヶ淵を周回する歩道は、管轄が複数にまたがることもあり、統一的なルート設定や案内等は行われていない。

また、その周辺には、日本武道館、科学技術館、国立近代美術館、同工芸館（北の丸公園内）、昭和館、千鳥ヶ淵公園（千代田区）千鳥ヶ淵戦没者墓苑、皇居東御苑などの利用資源が立地し、これらを合わせた利用も見られる。

当地域のアクセスは、地下鉄（東京メトロ・都営）九段下駅に近く、半蔵門駅、竹橋駅（東京メトロ）からのアクセスが可能で周辺の公共交通機関は発達している。



3. 各施設の利用状況

千鳥ヶ淵及び周辺における利用施設について利用の状況を以下にとりまとめた。とりまとめに当たっては施設の管理者へのヒアリングを実施している。

(1) 千鳥ヶ淵水面

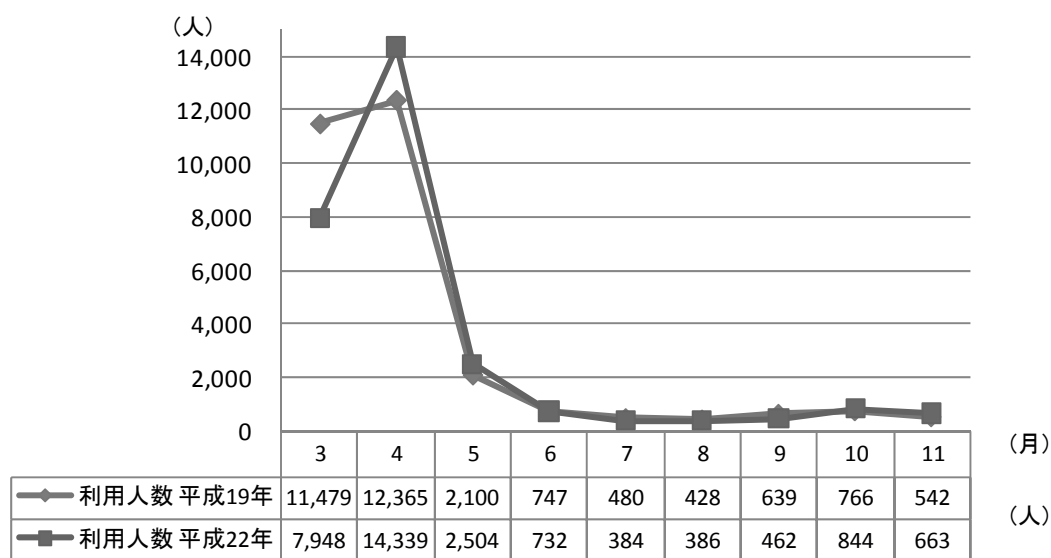
千鳥ヶ淵水面部分は、石垣、堤塘とともに皇居外苑の一部として環境省が所管しているが、その一部をポート場用地として千代田区に使用許可を行っている。千代田区では、ポート場施設として管理棟（ポートハウス）を整備している。

以下については、ポート場利用についての千代田区観光協会、千代田区区民生活課への聞き取り結果等をとりとまとめたものである。

■概況

- ・ 昭和 25 年から始まった千鳥ヶ淵のボート利用は、当時の人々の荒んだ心を潤す当時の数少ない娯楽とされ、その後も 60 年にわたり水辺の憩いの場・平和の象徴として親しまれてきた。
- ・ 毎年 3 月から 11 月までの 9 ヶ月間運営（12 月～2 月は休み）。イベントのない通常時の利用時間は 11:00～17:30（乗船受付は 17:00）。
- ・ 年間利用者は約 3 万人で、そのうち約 8 割が 3～4 月（サクラ開花期）。次に利用が多いのは、5 月（1 割弱）。夏場の利用は少なくなり、秋には小ピークがある。
- ・ ボートは首都高下をくぐることができ、1 周 30 分程度で千鳥ヶ淵全体をまわることができる。

月別利用人数の推移 （千代田区区民生活課調べ）



■利用者が感じる魅力

- ・ 利用者が感じている基本的な魅力は、都心でありながら、緑に恵まれ大変環境の良いところでボートに乗るというアトラクションを体験でき、憩いを感じることができること。

(観桜期 3月下旬～4月上旬)

- ・ ボートで北の丸公園側堤塘斜面上から水面に向かい枝垂れているサクラの枝の下を漕ぎながらゆったりすることに人気がある。(写真は千代田区観光協会 さくら祭り HP より転載)

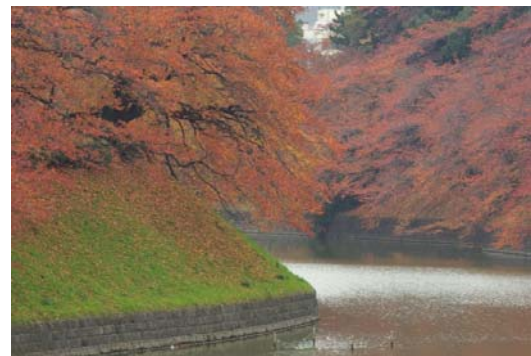


(サクラ紅葉時 11月)

- ・ ボートからのサクラの紅葉の眺めも魅力。

■利用上の問題

- ・ 夏場の利用者からはアオコ臭いといった苦情も聞かれる。(7～8月の利用者は年間を通じて特に少ない。)



■ボート場に関連したイベント

① 千代田さくら祭り

- ・ 毎年3月下旬～4月上旬に10日間程度実施される。桜のライトアップ(日没(18:30頃)～22:00)にあわせボート場の夜間営業(20時まで)が行われる。

② 納涼の夕べ(灯籠流し)

- ・ 毎年、東京のお盆にあたる、7月13日にあわせ、80隻のボートの乗船者を募集し、抽選された150～180人が灯籠を千鳥ヶ淵に浮かべる。靖国神社のみたままつり、戦没者墓苑の戦没者追悼式にあわせて行われる。

■今後のボート場利用に関する管理担当者の意見

- ・ 今後はサクラ以外にも新たな魅力づくりが必要。
- ・ 千鳥ヶ淵緑道の整備コンセプトである「さくら」と「四季の花」の道につながるような、四季折々の魅力をボートに乗った人にも見せられる風景を作りたい。

(2) 北の丸公園（皇居外苑 環境省所管）

■概況

(整備までの経緯)

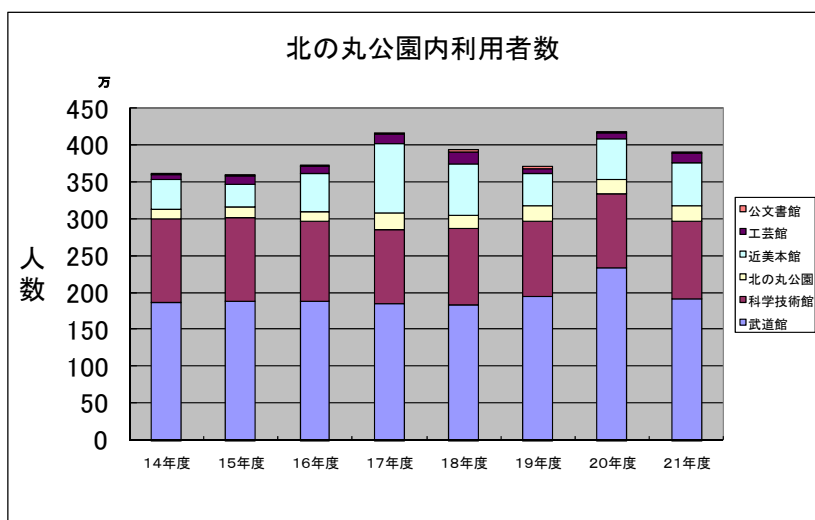
- ・ 北の丸は慶長12年(1607年)頃より構築され、途中から幕末まで御三卿のうち二家の屋敷地。
- ・ 明治7年からは近衛歩兵駐屯地となり、第二次世界大戦後は国有財産化。宮内庁、法務省、郵政省、労働省、警視庁等の機関が利用していたが、昭和38年5月の閣議決定「皇居周辺北の丸地区の整備について」で皇居外苑の一部として森林公園整備が決定。昭和44年4月に開園。

(施設整備)

- ・ 公園整備にあたっては、堤塘付近に皇居の森と同様の常緑広葉樹林を配置し、中央部に整備した芝生地と池の周囲には落葉広葉樹の疎林や花木を配置し、園内には日本武道館、科学技術館、東京国立近代美術館、同工芸館という文部科学省所管施設が立地。
- ・ 出入口は北側の田安門、東側の清水門、南側の北桔橋門口と乾門口の4箇所。田安門と清水門は歩行者専用であり、車両は日本武道館や科学技術館に至る場合には、北桔橋口から北に伸びる中央大通りを利用している。
- ・ 日本武道館や科学技術館の近くには駐車場が整備されている。

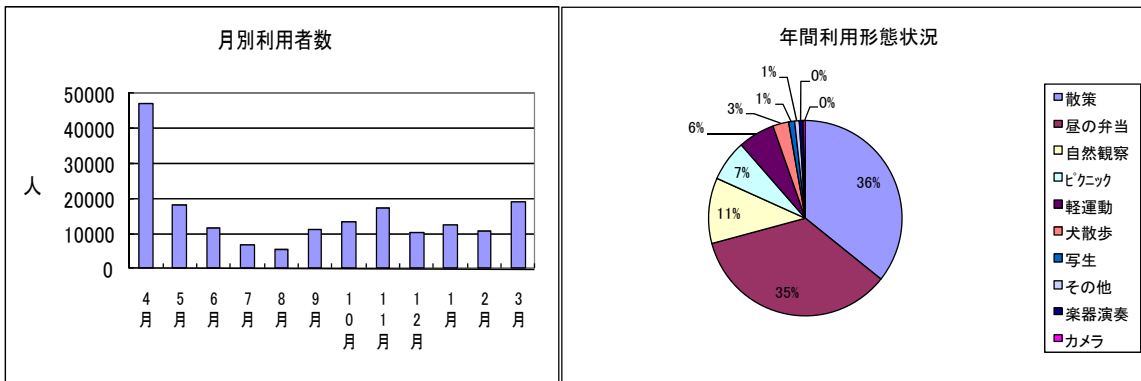
(年間利用者総数)

- ・ 平成21年度の利用者の内訳を見ると、日本武道館の約191万人/年が最多。次いで科学技術館約106万人、国立近代美術館(本館及び工芸館)72万人の順で、北の丸公園の巡視による目視で確認された公園部分のみの利用者数は、約20万人である。
- ・ 公園内各施設の利用者数は年度により変動が大きい一方で、公園部分のみの利用者数の年変動はほとんどない。

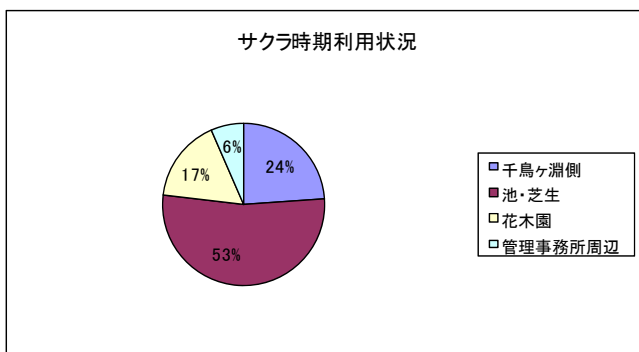
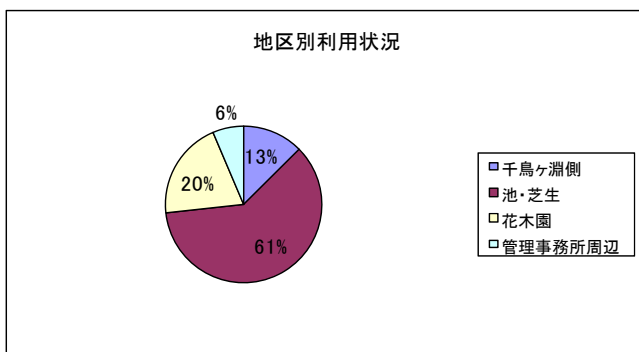


(利用の概況)

- 散策や昼の弁当を食べる場所等の憩いの場としての利用が全体の7割を占める。この中には、純粋な公園利用者のみならず、公園内に立地する武道館、科学技術館などの利用者による利用が含まれる。

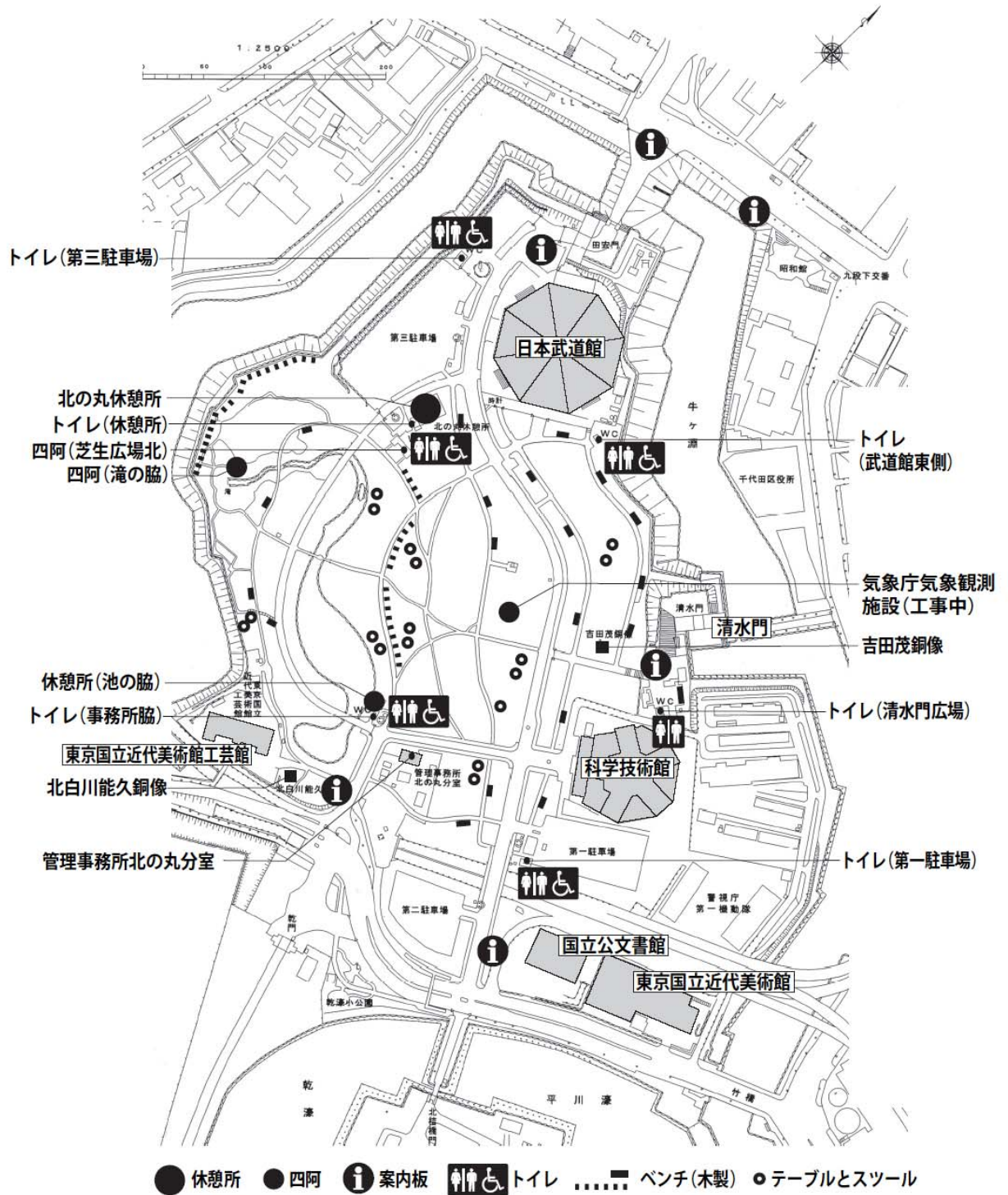


- 年間を通じて主な利用場所は、池・芝生のエリアだが、観桜期には、千鳥ヶ淵側の利用者が普段の2倍程度(2.5割弱)となる。



- それらと比較すると数は少ないが、自然観察利用が1割強みられる。
- 北の丸公園や皇居外苑濠は都心における自然観察の場として捉えられ、ガイドは、丸の内さえずり館や科学技術館「サイエンス友の会」などの地元にかかわりの深い人々が務めている。また、皇居東御苑と連動して歴史探訪・花木鑑賞のツアーが行われている。
- また、地元の学校が、自然観察を中心に四季を通じて授業や課外活動に公園を利用している例が見られる。

(北の丸公園利用施設配置)



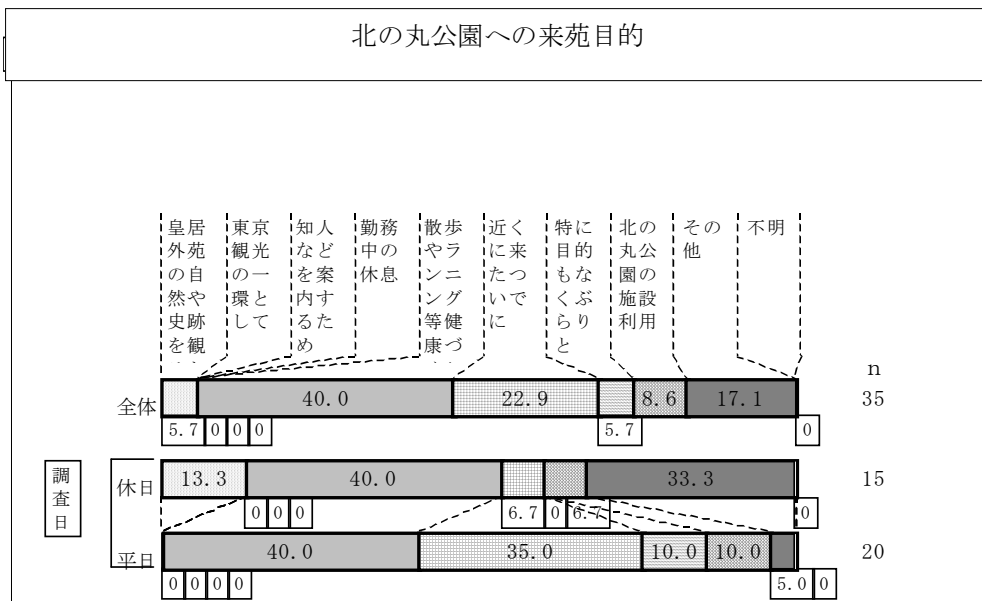
■ 利用者が感じる魅力

- ・ 北の丸公園を利用する自然観察会主催者やまち歩きガイド、学校関係者は、都心において他にない資源性や生物多様性の豊かさを重視している。(平成19年度ヒアリング結果による)

(北の丸公園利用者のとらえ方)

利用タイプ	とらえ方(位置づけや印象)	利用者例
日常型利用	緑が多く素晴らしい。 皇居東御苑、皇居外苑は東京在住外国人にとっても大切な公園。	皇居周辺の外国人(大使館在勤者)
自然観察会	自然公園の魅力がある。種の多様性が素晴らしい。	科学技術館「サイエンス友の会」
皇居探訪セミナー	北の丸公園は吹上御苑と連続する森であることが重要。	皇居探訪セミナー講師
学校利用	珍しい樹木があり、四季折々に豊かな自然が楽しめる公園。	千代田区立九段小学校
	校庭では味わえない開放感を味わえる。	千代田区立富士見小学校

- ・ 利用目的は、北の丸公園は休日・平日とも「健康づくり等」が多いが、その他では「休日は子どもと遊びに来る」人が多いのに対し、平日は「仕事できたついで」が多かった。(平成19年度アンケート結果による)



■ アンケート調査等からみた利用上の問題

- ・ 施設に関しては、トイレを明るくしてほしい、樹名板を充実させてほしい等が挙げられた。またボランティアガイドからは、サクラの老朽化を危惧する声がかかれた。

■ アンケート調査等からみた希望するイベントなどの要望

- ・ 「江戸城跡の歴史探訪」が最多で、続いて「皇居外苑の植物観察会」と「野鳥(水鳥)観察会」が続き、北の丸公園の歴史や自然の資源に触れるイベント開催を望む声は多い。

(3)代官町通り小土手(皇居外苑 環境省所管)

■概況

(整備経緯)

- ・ 代官町通りは明治33年(1900年)に整備。皇居を一周する内堀通りを東西にショートカットする役割を果たした。この工事により千鳥ヶ淵に新たに土橋が設けられ、千鳥ヶ淵と半蔵濠に分けられた。

(施設整備)

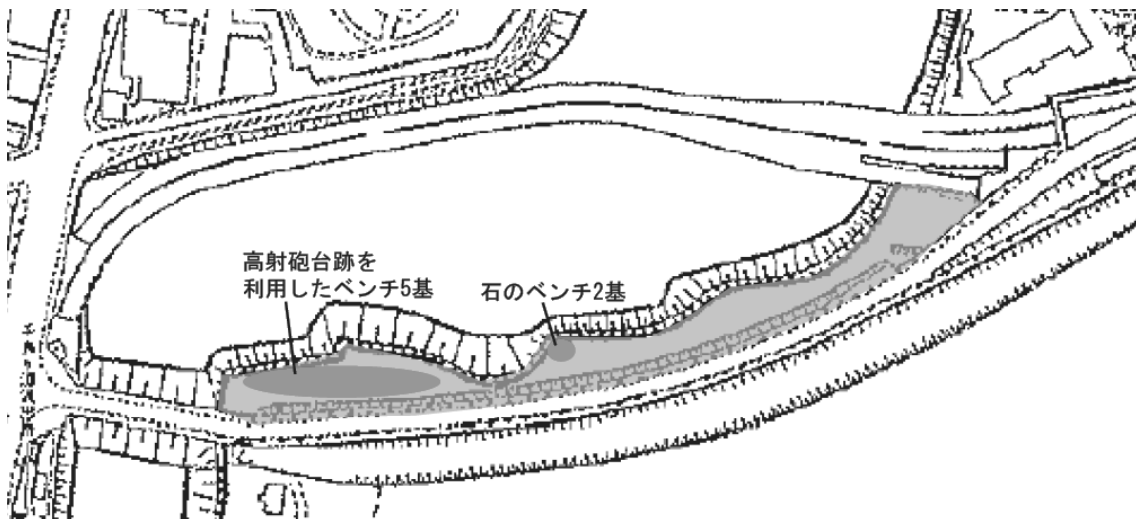
- ・ 環境省が所管するのは、代官町通りの北側に位置する土手上的の未舗装歩道と周辺植えこみ地で、千鳥ヶ淵を北に見下ろす高台を散策する歩道である。
- ・ 歩道上には、見晴らしのいい場所に石のベンチが計7基置かれている。解説板や案内板等はない。

(利用の概況)

- ・ 散歩、周辺の学校の環境教育等で利用されている。

(代官町通り利用施設配置)

H19年度皇居外苑(北の丸公園地区を含む)管理基本方針策定調査業務報告書及び現地調査より



(4) 千鳥ヶ淵緑道 (千代田区所管)

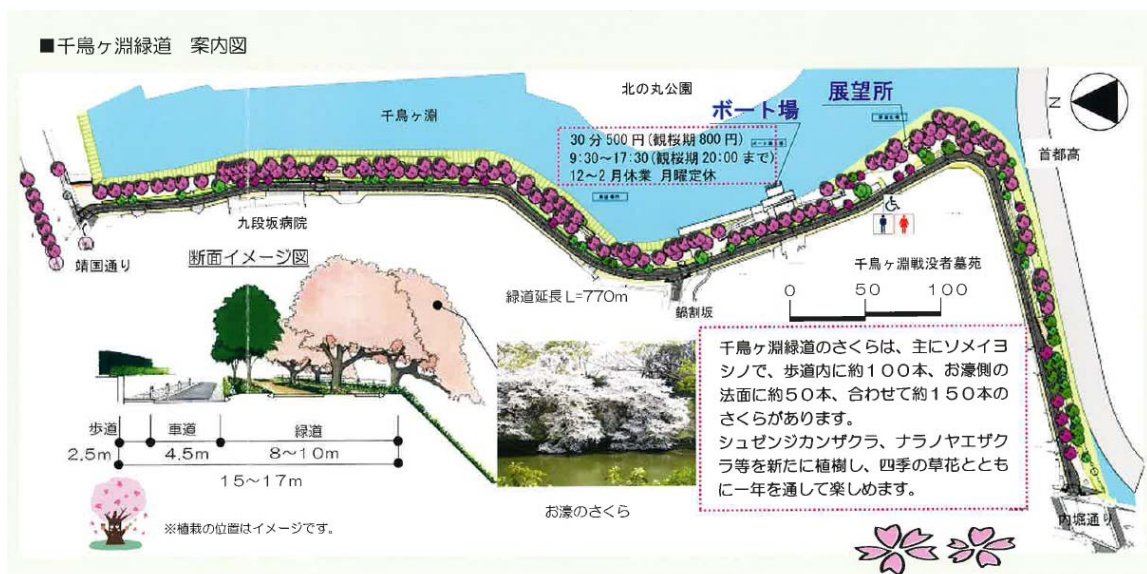
(千代田区観光協会、千代田区道路公園課聞き取り結果より)

■概況

(施設整備状況)

- ・ 千鳥ヶ淵緑道は、明治40年から昭和43年まで運行されていた市電の軌道跡に、昭和54年に整備された。
- ・ 皇居西側の千鳥ヶ淵に沿い千鳥ヶ淵戦没者墓苑入口から靖国通り沿いの麴町消防署九段出張所まで伸びる全長約700mの遊歩道。
- ・ 当初整備時に主にソメイヨシノを歩道内に約100本(千代田区管理)、濠法面に50本(環境省管理)植えている。
- ・ 平成19~20年度に「さくら」と「四季の花」の道をコンセプトに再整備し、四季折々の花木、草花を植え、観桜期以外にも四季の花が楽しめるように配慮した。舗装も、石畳をやめてバリアフリーやサクラ保全のために保水機能のある舗装に改修している。ポート場、公衆トイレも新設し、展望所も新たに設けた。
- ・ ソメイヨシノが老朽化してきたこともあり、中手のソメイヨシノ以外に早咲き(シュゼンジカンザクラ)、遅咲き(ナラノヤエザクラ)を新たに配し、長くサクラを楽しめるように配慮した。また、既存のサクラ老木は、危険性が伴わない限り、環境を良くして延命させることに重点においている。

(千鳥ヶ淵緑道利用施設配置)



(利用の概況)

- ・ 一般的利用形態は、散歩（犬の散歩含む）、昼食利用等。

(観桜期の利用概況)

- ・ 観桜最盛期は10～12日間。昨春は平成22年3月26日～4月6日（12日間）で、合計100万人が利用（左側通行のため、8割が濠沿いを歩ける靖国通り沿いからの入場）。
- ・ 平成15年以降は露店を排除。飲食を禁じ、通り抜けるに特化した花見スタイルが定着。



（第2回「千鳥ヶ淵の環境再生に関する勉強会」への千代田区観光協会資料）

■利用者が感じる魅力

(観桜期)

- ・ 千鳥ヶ淵緑道には、ソメイヨシノやオオシマザクラなど約260本の桜が植えられ、開花期には桜のトンネルの中を歩いているような体験ができる。
- ・ ライトアップによる夜桜見物や、緑道途中からのボート乗船が大きな魅力になっている。

■利用上の問題

- ・ 犬の散歩が多く、糞についての苦情があり、注意看板を配置している。

(観桜期)

- ・ 九段下の駅出口から渋滞が始まり、混雑時には緑道への入場制限がかかる場合もある。
- ・ 指定の駐車場は無いが車来場者は多く、ツアーの大型バスなどは北の丸公園、靖国神社の駐車場を利用している。容量オーバーになると、他には安全な乗降場所がない。

(5) 千鳥ヶ淵公園（千代田区所管）

（千代田区観光協会、千代田区道路公園課への聞き取り結果より）

■概況

- ・ 千鳥ヶ淵公園は、大正8年に明治期の市区改正事業の一環として開園し、現在、ソメイヨシノやヤマザクラなど約170本のサクラがある。
- ・ 平成18年度にサクラ保全のために整備工事を実施。土の保水性向上のため透水性舗装に変え、根際にベンチサークルを設置、サクラに光を当てるために常緑樹を伐採。公衆トイレの新設と代官町通り側の入り口をスロープ化（車椅子対応）。
- ・ また、ベンチサークルの中央のラインに沿ってつけられた印より道路側の部分を、観桜時の宴会可能エリアとした。
- ・ 日常的な利用者は、通勤時の通り抜け、散歩（犬の散歩含む）、休息、昼食等。
- ・ 皇居一周マラソンの出発地点として、ランナーが利用。
- ・ 千代田さくら祭り期間中は、千鳥ヶ淵緑道を訪れた人がここまで足を延ばし、沢山の人がでにぎわう。

■利用者が感じる魅力

- ・ 皇居外苑濠で半蔵濠の開放的な風景を見ながらのんびりと過ごせる。
- ・ ランナーにとっては貴重な休息エリア。
（観桜期）
- ・ シートをひいてのお花見をすることができる。

■利用上の問題

- ・ 多くのランナーが利用するため、ランナー同士の場所取りや一般歩行者との接触事故、ランナーによるゴミ捨ての問題がある。

3. 公園的利用の面からの千鳥ヶ淵の課題・可能性

以上、千鳥ヶ淵及びその周辺の公園的利用について概観してきたが、これを通じて以下のような課題や今後の利用展開の可能性が考えられる。

(1) サクラの観桜期以外への展開、分散

千鳥ヶ淵及びその周辺での公園的利用は、観桜期への集中が著しい。これによる混雑、交通渋滞も見られている。このようなことについては、サクラ（ソメイヨシノ）以外の利用資源を開発し、利用の分散を図ることが考えられる。

千鳥ヶ淵には、紅葉など他の時期にも景観的に優れた時期があり、また、千代田区によるソメイヨシノ以外の品種の植栽や四季を通じて楽しめる植物の植栽などの取組もあり、このような動きを進めることで、四季を通じた利用を推進することができると考え替えられる。

(2) 千鳥ヶ淵を周回する歩道の利用

千鳥ヶ淵は皇居外苑濠において唯一、一般の利用者が周回できる歩道が整備されている濠である。この周回ルートは、濠、樹林の見晴らしの良い歩道で、適度の起伏があり、景観が次第に変化することから園路として優れた潜在性を持っていると考えられる（第2回勉強会 資料4-1 付属資料参照）

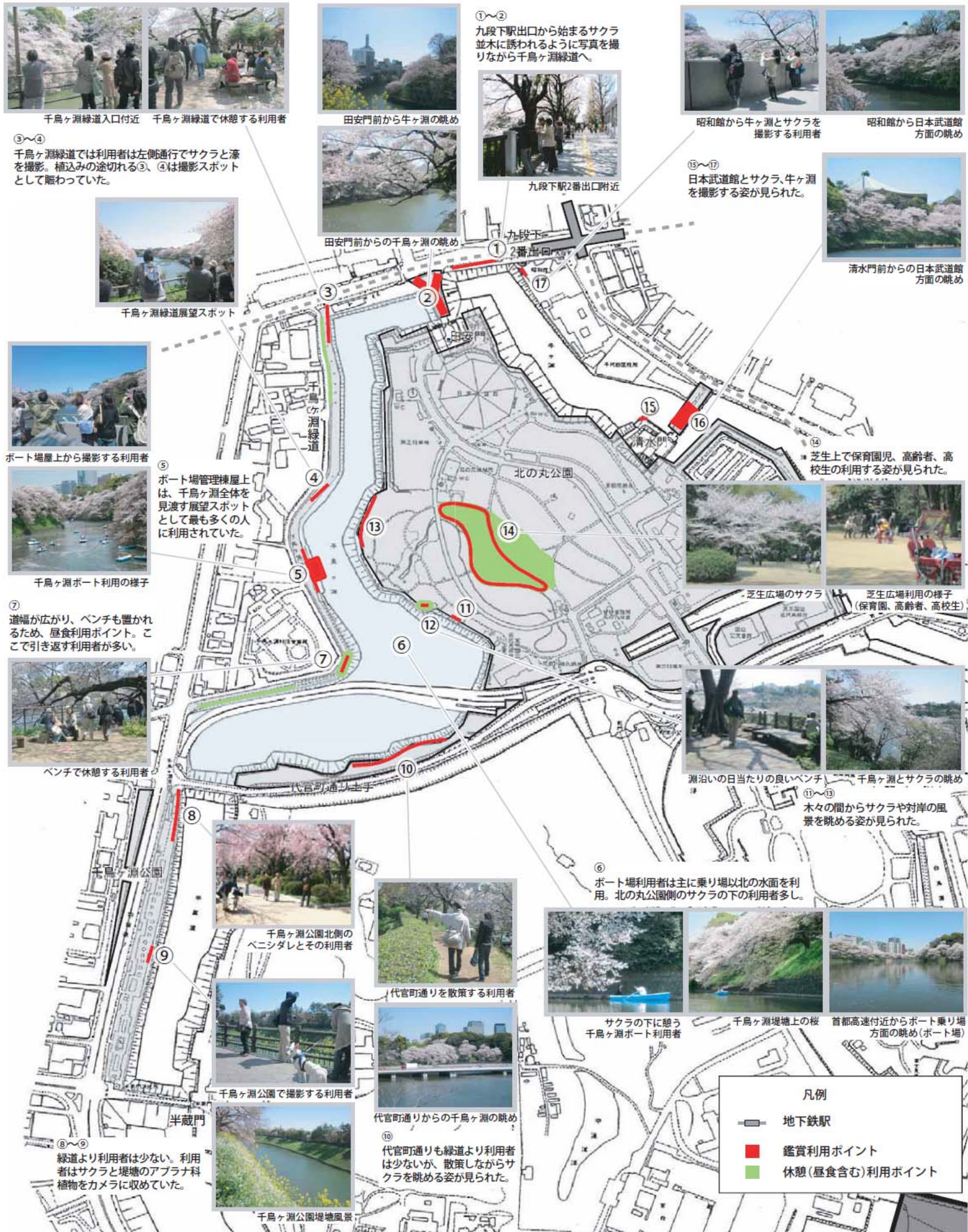
この周回歩道は、北の丸公園（環境省）、代官町通り土手（環境省）、千鳥ヶ淵緑道（千代田区）と複数の区域、管理者にまたがっていることもあり、これまで、利用の実態としても、管理者の意識としても周回ルートとしての意識は薄かったと考えられる。

今後、周回ルートを意識した管理を行うことは、千鳥ヶ淵緑道への利用集中への対応や四季を通じて楽しめる場の提供にも役立つと考えられる。

(3) 新たな利用形態

これまでの千鳥ヶ淵及び周囲の利用は、ボート利用と散策が主な利用形態であった。これは、水面へのアクセスが限られていることや水質が悪いことなどが影響していると考えられるが、一方では、一部の利用者には、北の丸公園や皇居外苑濠は都心における自然観察・環境教育の場として捉えられ、地元の学校が、自然観察を中心に四季を通じて授業や課外活動に公園を利用するなどの新たな試みも見られる（資料3-2 参照）。

また、今後水質の改善や自然環境の再生が進んだ場合、水辺とのふれあい、自然観察などの利用の展開も考えられる。



資料4-1 別紙

観桜期の千鳥ヶ淵及び周辺の利用状況調査(平成23年 4月)

※H23年度は3月11日発生の東日本大震災の影響により、さくら祭り(桜並木ライトアップ・ボート場夜間運営等)は中止。ボート運営時間は9:30～17:30。
 ※ ①～⑦は東京メトロ九段下駅2番出口から、千鳥ヶ淵～千鳥ヶ淵緑道・公園～代官町通り～北の丸公園～千鳥ヶ淵の順に利用した際の鑑賞ポイント

